

メンターとの出会いを通して

生涯にわたって自己研鑽に取り組むべき使命を負っている私たち教師には、メンター（「良き指導者」「恩師」）との出会いが極めて重要と考えます。

私がメンターと慕う「よき先輩」との出会いは、二十年以上前の道德の研究授業の場でした。子供たち一人一人が授業に積極的で、ねらいに関わる発言を主旋律として、思いのこもった呟きが和音のように響き合う授業でした。授業記録を読み直すと、子供の発言の促し方や聴く姿勢、問い返しのタイミング、他の子供たちへの切り返しなどが、潤滑油として実に効果的に作用していることに驚きました。指導案からは読み取れないのですが、授業を支える技や子供を本気にさせるための心配りや配慮が見えました。教師の本当の力量は子供の姿となって証明されることを示す言葉、「大切なことは目に見えない」を実感した授業でした。

その先輩からは、百メートル走のタイムを伸ばす秘訣や子供一人一人が主人公となる学級経営の進め方、生徒指導の要点などのノウハウを伝授いただきました。さらに、大きなピンチを成長のチャンスに変えた実践から、子供主体の教育に対する情熱や使命感などを学びました。間近で教師としての生き方や在り方を吸収できたことは、自分の財産となりました。その他、当時としては先進的であった道德の時間におけるティームティーチングにチャレンジし、教育雑誌に寄稿したこともよい思い出です。

子供でも大人でも、よきメンターに恵まれることは、この上ない幸せに違いありません。まさに「感化」や「陶冶」と同義ではないでしょうか。メンターに対する憧れの気持ちが、困難に向かうエネルギーに変化します。生き方のモデルとしての存在が、具体的な目標の設定につながります。そして、小さな進歩でもメンターに認められ励まされることが喜びとなり、さらなる努力に結びつきます。

現在私は、教職員の指導・助言をする立場にありますが、先輩から受け継いだバトンを私なりに味付けし、後輩に繋ぐこと、つまり誰かのメンターになれるよう、全力で取り組みたいと考えています。